

風にのる海賊たち

後藤 竜二

絵 津田 櫓冬



後藤竜二

風にのる海賊たち

講談社 1973

214p. 21.5cm (児童文学創作シリーズ)

ごとうりゅうじ

風にのる海賊たち

昭和48年3月24日 第1刷発行

昭和48年7月4日 第2刷発行

作 者 ごとうりゅうじ
後藤竜二

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号 112

電話 東京03(945)1111(大代表)

振替 東京3930

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社 大進堂

定 価 600円



風にのる海賊たち

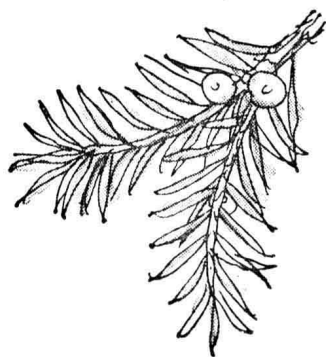
後藤 竜二・作

津田 櫓冬・絵



講談社





風^{かぜ}にのる海賊^{かいぞく}たち

——もくじ——

- 1・おんこの木^き……………7
- 2・レーンジャー^{ぶたい}部隊……………19
- 3・ずり山^{やま}……………27
- 4・老婆^{ろうば}……………35
- 5・墓^{はか}……………48
- 6・再会^{さいかい}……………59
- 7・長屋^{ながや}……………77



13	12	11	10	9	8
・	・	・	・	・	・
なかま	朝	母	ガリ切り	家	星あかり
.....					
179	163	151	130	117	105



*おんこの木き（いちいの木きのこと、アイヌ語アイヌ語でこうよばれる。）

1 おんこの木



がけの上のおんこの大木は、赤銅色のえだえだいっぱい
に、ことしもまた赤いちいさな実をつけた。

ドリは、高いえだに作られたぶどうづるのぶらんこをゆ
らしながら、ちいさな実をつんでは口に入れた。舌の上で
もてあそぶようにあまい実をすいとると、まるいくちびる
をすぼめて、あざやかな緑色のたねを、ぶっとはるかがけ
下の川にむかってふきとばした。

(つまらない……。)

夏休みが終わろうとしていた。

キャンプもなく、ハイキングや海水浴もなく、もちろん、
炭鉱まつりもない夏だった。

閉山になった奥ノ沢町をおとずれるものはいなかった。

去年、夏休みには再会しようとやくそくしてわかれたミ
キオやトシエたちも、やっぱり帰ってほこなかった。しばら
くつづいていた文通もとだえていた。「がんばってるか」。
と、担任だったゴロさんから、かんだんなはがきを七月の

末にもらったきりだった。そしてドリは、そのゴロさんのはがきにさえ、返事を書かないままだった。

(みんな、どうしてるのかな……)

また一つぶ、赤い実をつんで口に入れ、ふっとたねをはきだすと、強い風がちっばけな緑のたねをさらって、がけ下の川にはこんでいった。

炭塵によぐれて、こいココア色をしていた川も、いまは、川底の石の一つ一つが見えるほどにすんでいた。

ドリはのろのろと頭をめぐらせて、川にそったアスファルトの道の遠くを、またぼんやりとながめはじめた。

がらんと広いアスファルトの道は十三キロつづき、函館本線の通っている音別市までのびていた。窓も玄関もべたべたと乱雑に板を打ちつけられた数軒の商店と、からすやいぬやねこの巣になっている四階建ての社員団地が二棟、白いからっぽの道にへばりつくようにならんでいる。

さかな屋・やお屋・洋品店・食堂・喫茶店・文房具店・薬屋・米屋・生活協同組合・郵便局・パチンコ屋・映画館、ひしめきあっていた飲み屋街、そして労働会館、——去年の夏までは、おびのように長い奥ノ沢町をぎっしりとうめていた建物のすべてが、ほとんどあとかたもなくとりこわされていた。

社員団地と川をはさんでむかいあい、だんだん畑のように密集していた木造平屋の坑夫長屋も、い



まは六棟^{むくばしら}だけになつていた。

ドリたちが三月^{がつ}まで通^{かよ}い、さいごの卒業生^{そつぎょうせい}を送^{おく}りだした中学校^{ちゅうがっこう}も、コンクリートの土台^{どだい}がごろごろとこがっているだけだった。

選炭場^{せんたんば}と奥^{おく}ノ沢鉱事業所^{さくさうしやしょ}は、雨^{あめ}や雪^{ゆき}にあらわれ、風^{かぜ}にふきさらされたまま、いまにもくまざさの野^のの中^{なか}にくずれ落ちてしまひそうなかっこうで建^たっていた。

くまざさの野^のは、炭鉱^{たんこう}がつぶされるのをじつと長いあいだ待ちつづけていたかのように、ほとんどの人^{ひと}のいなくなった町^{まち}の四方^{はう}からおしよせ、町^{まち}のいたる所^{ところ}に発生^{はつせい}し、ほぼ町^{まち}の半分^{はんぶん}をおおってひろがり、いま、高く晴^はれあがつた空^{そら}の下^{した}で、強い風^{つよ かぜ}にふかれてうねり、よびかわしあうように、鳴^なっていた。

(みんな、元氣^{げんき}で、がんばってるのかな……。)

ドリは明るすぎる遠^{とほ}い空^{そら}に目^めを細^{ほそ}めて、びったりとこしをつつんだデニムのズボン^{あし}の足を、ゆらゆらと風^{かぜ}にゆらした。

去年^{きょねん}、夏^{なつ}の終^おわつた九月^{がつ}。一か月間^{げつかん}の閉山^{へいざん}反対闘争^{はんたいたいそう}のかいもなく、奥^{おく}ノ沢炭鉱^{さわたんこう}はつぶされてしまった。「残念^{ざんねん}ながら、閉山^{へいざん}反対闘争^{はんたいたいそう}で勝^かつた例^{れい}は一つもない。すでにいま、われわれは、閉山^{へいざん}後の補償^{ほしょう}をどこまで会社^{かいしゃ}にやらせるかこそが、もっとも重要^{じゅうよう}な問題^{もんだい}となつたと考^{かんが}える。」

組合の委員長は、そんなふうなことをなみだながらにうったえ、そして、会社がわがおしつけてきた閉山案を、ほとんどそのままとめてしまったのだった。

十月にはいると、奥ノ沢町の人々は、新しい職場をさがして、ぼつりぼつりと炭鉱を去っていった。会社の坑夫たちだけではなく、下うけの組夫や、鉄工所・配管屋・電気屋・炭鉱病院・鉄道関係・商店街の人々など、町の三分の二もの人たちが、年の明けないうちに、あわただしく奥ノ沢町を去っていった。いく台ものトラックが、ひっこし荷物を満載して走りまわり、あき家はブルドーザーやクレーン車によつてたちまちとりこわされた。

正月がすぎると、炭鉱にのこっている人はほとんどいなくなった。札幌・室蘭・苫小牧・東京・千葉・神奈川、さらには大阪や神戸や九州にまで、人々は新しい職場をさがして去っていき、そうして、ドリのたくさんのなかまたちも、みんな、いなくなつた。

(くも！)

ゆらしていた足をとめ、ドリは頭の上のえだをつかんでぶらんことをおとした。

晴れあがった空をさえぎるように、おんこのえだとえだとを結んで、直径二メートルほどのくもの巣があるのに、はじめて気がついた。

日の光をあびて金色にかがやく巣の中央に、親指の頭よりも大きな黒いくもがいた。くものそばに

は、糸をかけられ、ひからびてしまった赤とんぼのからが、よごれたさなぎのようにひっかかってゆれていた。

(まぬけなとんぼ。)

ドリは赤い実を一つぶつんで口にふくみ、ねらいをさだめて、ふつと緑のたねをふきとばした。

かたいちいさなたねは、風にあっていきおいをつけ、まっすぐにとんで、くものまるいしりにあたり、ポツンとかわいた音をたてた。くもは、つうと銀色の糸を光らせて、なまりのように巣から落ち、たちまち草むらの中にすがたをかくしてしまった。

(あたしの木だよ！)

ドリは顔をしかめ、小えだの先を折って乱暴にくもの巣をはらった。手がとどかなくてのこったところには、小えだを力いっばいなげつけた。が、小えだはそのままこわれた巣にはりついてしまい、ひからびた赤とんぼのからといっしょに、ひどくゆっくりと風にゆれた。

チツチツとドリは舌を鳴らし、一段上のえだまでのぼって、足でゆさゆさとえだをゆすった。はりついた小えだにひきずられて、のこった巣がようやく落ちていくのをたしかめてから、ドリはまたぶらんこにもどり、しりポケットからめっきのはげたハーモニカをひきぬいて、陽気に『囚人の歌』をふきはじめた。

ゴロさんのすきな歌だった。

音痴おんちのくせに、ゴロさんは、よくこの歌うたを歌うたった。いっしよに教室きょうしつのそうじをしながら歌うたったこともあつた。班学習はんがくしぎのとき、ヨッチがミキオにさからつて、「おもしろくもねえ、おれあ、やめた！」とあばれたときにも歌うたった。みんなでどなるみたいに歌うたつて、となりの先生せんせいからしかられたこともあつた。

そして、ことしの三月がつ。全校ぜんこうでわずか十三人にんになつてしまつたみんなと、閉校式へいこうしきのあとで歌うたった。雪ゆきのふる日ひ、さいごのジーゼルカーで、ゴロさんが日高ひだかの中学校ちゅうがっこうにいつてしまふときにも歌うたった。堺さかいさんやゴンやヨッチや田川たがわさんなんかといっしよに、ゴロさんはドリのハーモニカにあわせて大おおきな声こゑで歌うたつていた。

「負けんなよ、いいか、負けんなよ。」

ゴロさんの頭かぶにも、めがねのつるにも、雪ゆきがつもつていた。

(日高ひだかの山奥やまおくでも、分校ぶんこうの子どもたちや母親ははははといっしよに、やっぱりゴロさんは歌うたつてるのだらうか……。)

そうにちがいない、と、ドリは、はがきの返事へんじのことをまた考かんがへながら思おもつた。

(ゴロさんなら、きつと、やっぱり、がんばつてゐるんだ……。)

でも、とドリは遠い空とほそらに目めをこらして、はげしくハーモニカをふき鳴ならした。

(ゴンもヨッチも、このつぶれ炭鉱たんこうのみんなは、どいつもこいつも、すっかりかわつてしまつたんだ

よ、ゴロさん……！)

わすれていられた父や母のことをまた思い出してしまつて、ドリはぶつとハーモニカをやめた。そろえた両足をはねあげるようにして、力いっぱいぶらんこをこいだ。ふといおんこのえだがたわみ、ぶどうづるがきしんでギシギシと鳴った。

(こんなくさつた町、さつさとミサイルでぶつとばしちゃえばいいんだよ！)

地下一千メートル。湿気の多い摂氏三十六度の三ノ沢炭鉱で働きはじめるようになってから、父はすっかり人がかわつてしまつたようだった。

父は、いつもつかれきつて帰つてきた。バイクで一時間もかかつて通わなければならないせいもあつたが、三ノ沢炭鉱は請負給だったから、奥ノ沢炭鉱で働いていたと同じ給料をとるためには、いままでの二倍以上もの石炭をほりださなければならなかつたのだ。

酒豪だといつて自慢していた父が、しょうちゆうをコップに一ぱいも飲まないうちにいつぶれ、そのままその場にひっくりかえつてねむつてしまうことが多くなつた。家族とことばをかわすようなこともなくなり、よくじつ、母にゆり起こされて、またなにもいわずに熱い坑内にをかけていった。

しかし、そのころはまだ、ドリが本気で父や母をにくむというようなことはなかつた。

ときどき仕事を休むようになった六月ごろから、父は飲んだくれて母やドリにくだをまき、たばこのやにによれた歯をむきだし、とても父のことばとは信じられないようなことばを口にしていひひ

とわらったりするようになった。

父と母がよく口げんかをするようになったのも、そのころからだった。閉山直前の六月に建てた家のことがいつも原因だった。月に二万五千円ずつもの銀行ローンなど、いまの父の給料では、とうていはらいつづけることはできなかった。月の半分しか働きにいかなくなったこのごろでは、借金の返済どころか、毎月の生活費にさえたりなかった。

夏休みがはじまる十日前、取っ組みあいの夫婦げんかの末に、母はおばがやっている音別市の飲食店で働きはじめた。

朝は七時に起きて、三時半まで内職のレース編みをつづけ、念入りに化粧をして、五時の開店にまああうようにでかけていくのだった。店に着くとふろしきにつつんできた和服に着かえ、十一時の看板まで立ちどおしに働いた。夕食も、十分か十五分くらいで、立ったまますばやくすませなければならぬほどいそがしかった。帰りは真夜中の十二時をすぎることが多かった。

どんなにドリが反対しても、母は店をやめようとはしなかった。

「しょうがないだろ。」

と、ひとこといったきりだった。

父は、なにもいわなかった。いつそうしばしば会社を休み、しょうちゅうを飲んだ。母になじられると、